
我が家物語

naoki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家物語

【Zコード】

Z2686C

【作者名】

naoki

【あらすじ】

「我が家」は現在4人家族。私こと新島奈津^{（＝イジマナツ）}を筆頭に、女・男・女の三人兄弟。プラス、我が家の大黒柱、母^{（ハハ）}。私と母と弟と妹。4人で始めた生活は9年目。それには訳があるけれど…。

1 第三次「ゴキちゃん騒動

「こんにちは、みなさん。今日は我が家について、お話ししたいと思います。

「我が家」は現在4人家族。私こと新島奈津（ハヤシナタ）を筆頭に、女・男・女の三人兄弟。

プラス、我が家の大黒柱、母（ハハ）がいます。

私と母と弟と妹。4人で始めた生活は9年目。それには訳があるけれど、お話しするのはまた後日。

今日は我が家の大事件、「第三次「ゴキちゃん騒動」」についてお話しします。

第三次「ゴキちゃん騒動

もともとうちのアパートは、駅まで徒歩10分・家賃6万・スーパー近しという好条件だけで選んだ新居。

当然ながら、内装デザインその他にはハナから期待できないわけで。配水管だか薄い壁一枚だかで繋がった集合住宅では、常に「ゴキちゃんの脅威から逃れられないのです。

「ギャアアアア！」

第三次「ゴキちゃん騒動の幕開けは、弟こと健一の悲鳴から始ました。言つておきますが、我が家は狭い。悲鳴と同時に、家中から「何だどうした」と残りの3人が走り出ます。

「何、どうしたの？」

「黒いアイツが出た！」

「黒いアイツ」。

『ハリー・ポッターにおける「例の人」のように、この単語は十中八九「ゴキちゃんを指す。

「まさか！？」

「え、どこビート？」

私と母は既に戦闘態勢。「ゴキちゃんは人類共通の敵であるからして、総員で退治に当たらねばならないわけです。

健一が言うには、「黒いアイツ」の発生源は健一と亞津子の勉強部屋。しかも壁伝いに天井近くまで上っているという。

こういうとき、我が家で唯一の男であるはずの健一はまるで役に立たない。まるで駄目男っぷりを發揮する彼の代わり、仕方なく私と母が部屋を覗きこんだ。

「うう……」

私は絶句した。何しろゴキ……いや黒いアイツは、勉強机のほぼ真上、天井近くに這い登っている。こういうとき、人類は無力だ。唯一対抗できる手段と言えば……

「これ、届く？ 届きそう？」

母がそう言つて、コックローチを差し出した。ちなみに母、この時点でゴキブリの位置がわかつていなし。仕事から帰つて即、コンタクトを外したためだ。

届く？と言われても、他に戦力がないのだから仕方あるまい。私は机を足がかりに、背伸びして天井にコックローチを吹いた。一発目の攻撃！

シユ　　！！

パタパタパタつ！！

「！？ ギヤアアアア！！」

「ウワアアアア！」

「キヤーッキヤーッ！！」

あろうことか、黒いアイツは宙を飛んで我々に襲い掛かってきた！
阿鼻叫喚…一瞬にしてパニックになる一同。しかしさすがの大黒柱、母は敵の逃亡先から裸眼の視線を外さなかつた。

「いた、あそこっ」

「母バス！」

親子の連携でコックローチを手渡すと、母は地面を這い蹲るゴキに更なる攻撃を繰り出した。

シユー！！

シユー！！

シユ　　！！

…シユ　　！　　……

や、やすが母。抜かりないな。

母親の雄姿を見せ付けて、しつかり母はゴキを退治した。
こうしてこの度のゴキ退治は無事終わったわけだが…実はこのゴキ
ちゃんという生物、我が家に出現するのは三度目である。
そんなわけで、我が家ではゴキブリ対策臨時の家族会議が始まってしまった。

「ゴキブリって何で出るのかなあ…何とかならないのかなア」

健一…何となるんなら、世界中の人類が何とかしている。

「そういえば、」「来て一年くらいにも出たよね、ゴキ」
「やうだっけ？　しばらくでなかつたんじゃなかつたっけ？」

母はすつとぽけてそんなことを言つが、私と健一はしつかり覚えて
いる。

今の「我が家」に移つてから一年目、ある朝ダイニングに出てみると、薄暗い中にゴキちゃんがいたのを。
その後すぐにホイホイを設置したので、またしばらく現れることが
なかつたのだ。

最後に田撃したのは、ちょうど一年くらい前。そう考へると、今回
で三度田の「ゴキちゃん騒動」となる。

「またホイホイ買つ？」と健一。

「アレ、中身確認しなきゃいけないでしょ？ あれが何かねえ、やなんだよねえ…」と母。

「何かヤダよ俺。今こいつしてる間にでも、ゴキがどっかにいるかと思うと」「健一。

「お前ねー、寝る前にゴキ、ゴキ言つなよー。寝れなくなるだろー」と私。

「すっかり眼さえちゃつたよね」と母。

こうして、ゴキ談義の夜は更けていく。

…ちなみにこの時、深夜一時。

我が家は大抵、夜中の家族会議で大事なことを話し合つ。笑い混じりの家族会議、そしてそこでは大抵何も決まらない。決まらないまま、笑いですべてが終わつてしまつ。ここには何かを強引に進めようとする人間や、放任する人間はいない。

それが我が家。うちの家族。10年前から出来上がつた、新しい新島家のすがただ。

この日の夜も、ホイホイを置くかホウ酸団子を置くか、結局決まりに終わったのだった。

2 一生に一度の夜逃げ作戦（前書き）

「我が家」は私こと新島奈津（＝イジマナツ）を筆頭に、女・男・女の三人兄弟、そして我が家の大黒柱である母（ハハ）の四人家族。「我が家」が四人家族になつた訳は…。

2 一生に一度の夜逃げ作戦

「んにちは、みなさん。今日もまた我が家について、お話ししたいと思います。

再確認ですが、「我が家」は現在4人家族。私こと新島奈津トイジマナツを筆頭に、女・男・女の三人兄弟。

くどいようですがそれに加え、我が家の大黒柱である母ハハがいます。

私と母と弟と妹。4人で始めた生活は9年目。それには訳があるのですが…

今日はその理由について、さわりだけちょいとお話ししましょ。

一生に一度の夜逃げ作戦

小学生の頃、よくこんな会話を友だち同士で交わした記憶がある。

「ネエネエ、ナツちゃんのお父さんとお母さんって、どんな?」

「えー? んーとね、よくケンカしてるかなあ」

「ホント? うちのお父さんとお母さんも、ときどきケンカしてるよー」

子ども同士の、実に無邪氣な会話である。

唯一無邪氣でないのは、つちの「ケンカ」はなんじょやうの「ケ

ンカ」ではなく、おそらくシビアな「ケンカ」だったということだ。要するに、今で語つD▽。

D▽D▽じゃないよ、D▽ですよ。ダメステイックバイオレンス、要するに夫の家庭内暴力といふことですな。

9年以上経った今だから陽気にこんなこと言えますが、当時はとてもシビアだった。シビアかつ、シリアルスであった。筆舌に尽くしがたい感じがあった。

気づけば家にはそれがあり、生活の一部になっていたわけで。けれど私と、小学生だった健一^{ケンイチ}と亜津子^{アシコ}にとつて父は脅威ではなく、母にとつてのみの脅威だった。

私が中学3年生になつたある日だつた。母が私を呼んで語つた。

「奈津、お姉ちゃん。母さん、つむを出よつと語つ」

母は私を「お姉ちゃん」と呼んでいた。単純に、私が三人の子どもの中では年長だつたからだ。

「お姉ちゃんはもう大きいから、自分で選んでいいよ。家に残るのと、母さんと一緒に来ると、どちらがいい?」

中学3年生にして、私はいわゆる究極の選択を聞かされた。けど、答えは決まつていたので、私は即座に答えた。

「母さんについてく

…実に、…実に、シビアな話だが、…

別にほのぼのとか心温まるとか、そういう理由ではなく、私は単純に、ひたすらシビアに損得勘定をしていた。

この当時母は既に家を出て仕事をしており、飲んだくれのショーも

ない父よりよほど経済力があった。しつかりした考え方と知識と人脈があつて、ただの専業主婦ではなかつた母が、先の見通しもなく別居するはずはない。アパートも新しい職場も車も、健一と亜津子の転校先まで、母はちゃんと用意していた。

数日後の夜中、私と母と健一と亜津子は夜逃げした。

一生に一度の夜逃げだ。軽自動車に乗つて一時間と少し、荷物は既に貸しトランクに預けてあるから身軽なもの。ハイキングに行く手軽さで、私たちは家を出た。

「…………」

母は終始無言だった。私は窓の外を見ていた。健一と亜津子はまだ寝ていた。

実にシビアで、シリアルで、筆舌に尽くしがたい夜だつたけど、私はひとつのことしか考えてなかつた。

中学3年生の脳みそでは、父親がいなくなるとどういうことか、いまいち理解できなかつたのかもしれない。だから私はただ、あんな父なんかクソくらえだぞ、いなくたつていいぞ、代わりに私が親父になるぞ、と、訳の判らないことをぐるぐる考えていた。

だって、奈津はお姉ちゃんだから。

健一と亜津子と母のお姉ちゃんなんだから、だから大丈夫なんだ。

そうしてひとつ夜を越えて、私たちは新しい家族になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2686c/>

我が家物語

2010年11月16日08時34分発行